資 料

健常児をもつ父親研究との比較による障がいのある 子どもをもつ父親の父親意識の形成の特徴に関する文献検討

泊 祐子¹⁾, 竹村 淳子¹⁾, 牛尾 禮子²⁾ 長谷川桂子³⁾, 塚本 康子⁴⁾

[論文要旨]

本研究の目的は、健常児をもつ父親研究と障がい児をもつ父親研究の比較を通して、障がい児をもつ父親の父親意識の形成を明らかにすることである。方法は、1980~2010年の文献索引「医学中央雑誌」、「CiNii」、「教育研究論文索引」を用いた。

その結果,以下の結論を得た。

- 1. 健常児をもつ父親研究結果をみると、妊娠期・周産期から父親意識の形成がされており、出生以降に明らかになる子どもの障がいにかかわらず、共通に父親意識の形成の出発点があると捉えられる。
- 2. 健常児をもつ父親意識の形成には、子どもとのかかわりや自分が子どもの頃の父親とのかかわり方が影響していた。
- 3. 障がい児をもつ父親意識の形成は、子どもの障がいへの理解や障がい児の育児に直面して促進されるといえる。

Key words: 父親, 父親意識の形成, 障がいのある子ども, 文献検討

I. はじめに

障がい児をもつ親の、親となる意識の形成に関して、 牛尾¹¹は「母親の養育姿勢の変化プロセス」を明らか にし、母親が幾度かの落ち込みと回復を繰り返してい く姿を人間的成長と捉えていた。それは目良らの「親 となる」ことによる人格発達に加え、障がい児の養育 の経験によって人格発達が起こっている²¹という知見 と合致する。

障がい児をわが子と引き受ける親の受容過程や苦悩についての研究はすでに1980年頃から盛んに行われてきたが、研究の中心は主たる養育者であろう母親で

あった。子どもの障がいの種類により母親の受容過程は異なるという報告もある。すなわち、外見上目立つ肢体不自由児のケースに比べ、外見上障がいが隠された精神発達遅滞児の母親は現実を受け入れにくい傾向がみられた³⁾。また、自閉症とダウン症候群の各母親群の量的比較分析では、疑いから診断まで期間が比較的長く要する自閉症の母親群では、診断確定までが辛い期間であったという結果⁴⁾を得ている。

しかしながら、母親が障がい児を受容し安定した養育を行うためには、夫婦がお互いに支えられていると感じていることが重要であるという報告⁵⁾があり、父母共に第一の相談相手はお互いであり、夫婦関係の重

A Review on Formation of Paternal Consciousness in the Case of

Fathers of Disabled Children Compared with Those of Healthy Children

Yuko Tomari, Junko Takemura, Reiko Ushio, Keiko Hasegawa, Yasuko Tsukamoto

1)大阪医科大学看護学部(研究職)

- 2) 関西福祉大学看護学部(研究職)
- 3) 岐阜県立看護大学(研究職)
- 4) 新潟医療福祉大学健康科学部(研究職)

別刷請求先:泊 祐子 大阪医科大学看護学部 〒569-0095 大阪府高槻市八丁西町7-6 Tel/Fax: 072-684-7027

Presented by Medical*Online

(2457)

受付 12. 9.18 採用 13. 4. 1 要性が再確認される。

これまでの研究をみると父母を限定せずに「親」として捉えている場合もあるが、母親の障がい受容には、父親(夫)の影響が大きいということを考えると、父親がどのようにして障がい児をもつ父親としての意識を形成しているのか、について明確にする必要がある。

父親の育児における位置づけを研究にみると「育児協力」から「育児参加」という用語の使用に変化しつつも父親の育児への関与や育児行動に関しては、 仕事観・子ども観との関連性や母親の育児不安への 関連性^{5,6)}を検討していた。

われわれはこれまで障がい児をもつ親への支援や研究を行ってきた。父親が障がい児を受け容れることができず親になることから逃避する傾向にあったが、子どもの養育に参加するようになると、人間的変容をすること⁷⁸⁾は、父親の意識の形成であるといえよう。

健常児をもつ父親と障がい児をもつ父親とでは「父親意識の形成」にどのような特徴があるのか。これまでの文献を概括して父親意識の形成の特徴に焦点を当てた研究は見当たらなかった。

そこで、本研究では、健常児をもつ父親と障がい児をもつ父親の研究を比較して、障がい児をもつ父親の、父親意識の形成の特徴を明らかにすることを目的とし文献検討を行った。

なお,本研究では、育児・育自という営みによる親 意識の形成は文化・習慣やものの考え方に大きく影響 されるので、対象を日本の父親とし、わが国の文献を 用いることにした。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象文献の抽出方法

文献の収集方法は1980~2010年の文献索引「医学中央雑誌」、「CiNii」、「教育研究論文索引」を用いた。健常児をもつ父親を対象とした文献の抽出は、キーワード「父親」、「発達」、「意識」で、障がい児をもつ父親に関する文献はキーワード「障がい児」、「障害児」、「父親」で検索した。さらに広く文献を収集するために、検索した論文の文献リストのタイトルを利用して収集した。

2. 研究対象となった文献と分析方法

検索された文献のうち論文テーマと研究対象を確認 し、研究対象に父親がいること、父母両方がいる場合 には結果に父親を特定する内容がある文献を抽出した。

453

健常児をもつ父親を対象とした文献の抽出は、父親への看護支援・看護介入が主テーマである研究・報告・総説論文とし、学会発表、解説・論説は除き、文献数は、52編であった。

障がい児をもつ父親を対象とした文献の抽出は、研究対象が障がい児の親に限定した以外は、健常児をもつ父親文献と同じ方法で文献を抽出し、23編であった。

分析は、抽出された文献を共同研究者間で読み合わせをし、父親に関する記述および父母の比較に関する 記述を抜き出し、主テーマごとに整理した。

Ⅲ. 用語の定義

父親意識:用語を明確にするために宮崎の論文に着目すると、父親意識・父性性は異なるのかについて吟味^{9,10)}していたが、その中でも用語の厳密な区別は難しく、本研究では、「男性の大人が子どもの誕生・成長発達に責任を持とうと決意・認識しているさま」¹¹⁾とした。

Ⅳ. 結 果

1. 抽出された文献の主テーマの概括

抽出された文献を概括し、記述内容によって分類した。記述内容が重複する文献は、文献を読み込み主要テーマと思われる項目に分類し、重複カウントは避けた。75文献全ての記載には紙幅をとるので、各テーマを代表する文献を肩番号を付け示した。

健常児をもつ父親に関する52編の文献は表1に示す

表1 健常児の父親研究文献の分類

分類/記述のテーマ	文献数
父親意識の形成や父親自身の成長感	
父親意識の形成、父性・父親意識	19
父親自身の自覚や成長感、父親としての自己意識	
父親役割獲得	7
父親役割獲得・役割獲得プロセス, 父親役割への適応	/
父親意識の形成、役割獲得に影響する要因	
胎動の体験や胎児画像の見学, 分娩への立ち会い,	
初めての子どもの誕生や妻の妊娠による父親・父親	21
行動への影響	
子育てによる父親への影響	
父親の育児行動・養育態度と関連要因	
夫婦関係への影響,親子関係の関連性の比較,子ど	5
もの育ちへの影響	

N = 52

表2 障がい児の父親研究文献の分類

分類/記述のテーマ	文献数
子どもの障がい受容 障がい受容過程,告知のあり方,養育への影響,母 親との相違・比較	8
障がい児を育てる父親としての体験・心情 父親の体験、妻への思い、子どもへの思い、父親の 責任感・意識 親としての成長、父親の悩み	9
障がい児の養育による父親の行動・意識の変容 養育態度、父親の養育行動、養育上のストレス、父 親役割 父母の関係、夫婦の協働、父母の意識の比較	6

N = 23

ように4つの内容に分類できた。1つ目のテーマは、 父親意識の形成や父親自身の成長感であった。父親と なる意識の形成1213)や形成過程14), 柏木らに代表され る「親となる」人格発達の視点から父親自身の成長を みている研究があった15.16)。2つ目は、父親役割獲得 であった $^{17)}$ 。父親役割はどのように獲得されるのか $^{18)}$, さらに父親役割への適応19)等であった。3つ目は、父 親意識の形成に影響する要因200であった。夫立ち会い 分娩^{21,22)}や胎動を確認できる体験²³⁾はどのように父親 意識の形成や役割の獲得に影響しているのか、子ども の誕生や妻の妊娠による父親意識24)や父親行動への影 響をみていた。4つ目には、父親の育児行動や養育態 度と関連する要因の探索であった25.26)。ここでは育児 行動や養育態度の夫婦関係27)への影響や親子関係との 関連性、子どもの育ちへの影響28)はどうであるのかを みていた。

障がい児をもつ父親に関する23編の文献は表2に示すように3つに分類できた。1つ目のテーマは、子どもの障がい受容であった^{29~31)}。障がいの受容過程、告知のあり方、養育への影響、父母の相違を探索していた。2つ目は、障がい児を育てる父親としての体験や心情をテーマにしていた^{32~34)}。子どもに障がいがあったことでの父親としての体験・心情、また責任感に言及する研究であった。3つ目に、障がい児の養育による父親の行動・意識の変容をテーマにしていた³⁵⁾。障がい児の養育へのかかわりによってどのように父親役割行動を獲得しているのか、養育上のストレスはどうなっているのか、父母の関係や比較をしていた³⁶⁾。

2. 健常児を育てる父親の意識の形成

この節では、健常児を育てる父親に関する文献を 表1に分類できた記述内容に従い論述する。

1) 父親意識の形成, 父親としての自覚, 成長感

父親となる人格発達について、小野寺ら37)は、男性 が父親となっていく過程において、父親自身がどの ように捉えているのかを調査した。その結果、父親 となる意識には、「制約感」、「人間的成長・分身感」、 「生まれてくる子どもの心配・不安」、「父親になる実 感・心の準備」、「父親になる喜び」、「父親になる自信」 の6つの次元を明らかにした。親和性と自立性が高 い男性は、「人間的成長・分身感」、「父親となる自信」 が高いが「制約感」が低く、父親になることに肯定 的な傾向がみられた。「制約感」が高い男性は、父親 となってからの自信が低い傾向がみられることを報 告した。同じく、初めて子どもをもつ男性の親とな る思いに関する面接調査結果380では、「育児経験のな さからくる不安」、「児が繊細であるための怖さ」、「仕 事と育児の時間的アンバランス」、「外見と自己像の 不一致」、「男性の育児参加の肯定」で説明していた。 父親は「育児より家事,家事より仕事が困難ではない」 と認識し仕事を優先していたが、子どもの誕生を境 に、父親意識を変化させ「育児参加をしなければな らない」と義務感を持っていたが、具体的な方法が わからず悩んでいた。

2) 父親役割獲得

初産の夫婦3組を対象に妊娠期から分娩および産後にわたって継続的に参加観察とインタビュー調査した結果³⁹⁾では、周産期における夫の父親役割獲得プロセスは、【妻への気遣い】を根底として【父親としての気持ちの出発】、【夫婦としての体験共有】、【父親像の形成】、【父親像の行動化】、【父母の相違を認める】、【父親役割行動の具体化】という6つの段階をたどり、最終段階の【父親役割行動の具体化】を育児期としてのスタートに位置づけるという報告であった。

幼児をもつ父親329人を対象に質問紙調査において 父親としての肯定的自己意識の規定要因を調査した結 果では、①父親の肯定的な自己意識は、幼少期に温か い家庭で育った経験によって促進されること、②初め て父親になったときに育てやすい子どもであった場合 に育児に対する否定的感情を抑制し、結果的に肯定的 な自己意識の低下を防ぐという報告であった⁴⁰⁾。

3) 父親意識の形成, 役割獲得に影響する要因

父親意識の形成に影響する要因について, 周産期での夫立ち会い分娩の経験の有無が影響する41~45)という報告がある。父親意識の関連をみると、夫立ち会い群

は非立ち会い群よりも妊娠中および出産後に妻に積極的な行動をみせ、子どもや妻への愛情をより一層感じたことや父親としての自覚を感じていた46,47)。分娩への立ち会いは父親役割の行動や父親としての自覚を引き出すとともに、妻のそばにいてほしいという気持ちに応えており48)、夫婦のよい関係をもたらすと報告した。しかし、立ち会い分娩は、夫自身の経験とみるならばストレスフルであるという報告49)は、分娩終了後の「無力感」の大きさ50)や性生活への影響51)を示した。

妻の妊娠を肯定的に捉えた夫は「夫婦としての体験 共有」を経て、「父親像の形成」に至る。父親となる ことを実感するのは、妻が胎動を感じたり、子どもが 誕生した時であり、子どもとの初回接触が早いほど父 親となる実感が生じる時期は早かった⁵²⁾。

既婚男性が捉えている父親意識は、家族を養い家庭生活を守るというよりも家族主体の父親役割であり、父性性に影響を与えている因子は子どもと過ごす時間や子どもとのかかわり方と、子どもの頃の父親とのかかわり方や自分の父親に対する尊敬度も影響していた⁵³⁾。

4) 父親の育児行動・養育態度と関連要因

及川は1歳未満の子どもをもつ夫婦へのインタビューの結果から親の発達に及ぼす影響要因として、「親となることへの意欲」、「親となることによって成長したい」を報告し、夫婦間のサポートの充実や育児行動による子どもとの相互作用の重要性を指摘している540。

3 か月児をもつ父親への調査では、育児の共同化意 識のある人、妻への配慮の気持ちのある夫、子どもの 好きな人ほど育児行動をしており、育児に関する学習、 育児への態度と相関があることを指摘した⁵⁵⁾。

3. 障がい児を育てる父親の意識の形成

障がい児をもつ父親研究文献の分類の記述内容を 表2に従い論述する。

1) 子どもの障がい受容

子どもの障がいについて告知を受けた時に示す父親の反応に関して、広瀬らは父母両方への面接と質問紙調査から、面接結果では、父親は楽観型や現実対応型を示し、母親のように強い情緒反応の悲観型はなかった。しかし、質問紙調査結果には「絶望と困惑」、「悲しみ」の回答があったことから面接調査での父親の話しにくさが示唆された。また、父母ともに自分を支えたのは互いに配偶者であるという回答が最も多かっ

た^{56,57)}ことから、緊密な夫婦関係の重要性を指摘した。 父母の障がい受容や養育姿勢に大きな差はなく、父母 共に重症心身障がい児の存在を肯定的に受けとめてい る者が多いこと、また、早い時期の告知を望んでおり、 特に父親ははっきりとした告知を希望していた^{58,59)}。 子どもの障がい受容の契機について、玉井らは4事例 の父親への半構成面接集団から療育の場に参加し、自 分の子ども以外の障がい児の姿を見聞きする経験⁶⁰⁾で あることを、また平野は、父親が子どもの笑みや喜び の反応を返すことなどの変化への気づきを契機に、障 がいはあるが普通の子どもと思うようになり、外に連 れ出すようになったと報告した⁶¹⁾。

2) 障がい児を育てる父親としての体験・心情

障がい児を育てる父母を対象として調査結果をみると、父母の悩みの内容に関して、「同胞の世話」について母親が父親よりも有意に高かった⁶²⁷。自由記述をみると、母親は具体的に、「子どもの病状や症状の不安定」と記していたが、父親は、「将来」、「就職」のように漠然と記していた。悩みを誰にも相談したことのない父親は3割近くいたが、母親は1割強であった。さらに最初の相談相手は、父母ともにお互いに配偶者、次に父親は医師、母親は同じ障がい児をもつ親であり、相談行動に差があった。また育児に前向きになったきっかけは、父母ともに1位は「子どもの成長」であったが、2位は、母親は「同じ病気や障がい児をもつ親との交流」であったが、父親は「時間の経過」であった。

配偶者以外の相談者をもつことが少ない^{63~65)}障がい 児をもつ父親は、自分自身が体験した苦悩を配偶者で ある妻にも語らないが、看護師から賞賛されることや、 わが子を他者から大事に扱われる体験を通して、人と しての人間的価値観を取り戻すという報告があった⁶⁶⁾。 松山らの12組の夫婦ペアを対象とした調査結果をみ

ると父母間で「妻の精神的援助」の認識にずれがあり、 父親は父親なりに母親(妻)への気遣いをしているが、 父親は母親からの期待や要求がストレスとなっている のではないかと考察していた⁶⁷⁾。藤本らの事例研究を みると、父親は母親の愛情規範からくる負担感、重責 を回避させたい気持ちを持ち、父親自身も育児せざる を得ない状況から育児に携わることによって、人を優 しい気持ちにさせると父親は感じていた⁶⁸⁾。

3) 障がい児の養育による父親の行動・意識の変容

障がい児の養育へのかかわりによって父親役割行動 の獲得はどうなっているのかを検討する。

竹村らは、幼児期の障がい児をもつ父親がどのように養育行動を獲得するのかを12人の父親を対象にグラウンディドセオリーアプローチ法を用いて調査を行った。その結果、父親は、【世話を回避できない妻の姿に突き動かされる】ように、子どもの世話をし【障害児の世話に四苦八苦】する経験から【夫婦でやっていこうと腹をくくる】プロセスを経て養育行動を獲得していた⁶⁹⁾。

平野は3人の障がい児のいる父親に面接をして、父親の意識と行動の変容を明らかにした。養育当初は障がいに伴う介護の大変さに目が奪われているが、子どもの笑顔や反応への気づきを契機に、子どもによい環境の提供など生活設計を考えるようになり、積極的に養育に関与して人間的成長をしていた。その中で父親の役割を自覚し、肯定的に捉えられるようになったと報告した700。

その一方で、障がい児を養育している夫婦の協働感が高いケースでは、父親の役割認識が、子どもや家族の状況、母親の期待を柔軟に取り入れたものになっている。夫婦のコミュニケーションが良好な場合、父親は子どもの障がいや、母親が遂行している家事・育児を肯定的に受け止められていた⁷¹⁾。

V. 考 察

1. 父親意識の出発点:胎児の障がいの有無にかかわらず妻の妊娠中から

健常児をもつ父親研究の内容をみると,胎児の存在, 妊娠中の妻との体験の共有や立ち会い分娩により育児 への積極的行動がみられるなど父親としての実感をも ち,父親像をどのように形成しているのか等が,父親 意識の出発点となるテーマとなっていた。つまり妊娠 期・周産期では、障がい児をもつ父親も子どもの健康 レベルはほとんどの場合わかっておらず,どの父親も 同じような経験をして父親意識の形成が始まっている と考えられ,共通に父親意識の形成の出発点と捉える ことができる。

2. 健常児をもつ父親と障がい児をもつ父親研究に取り 上げられたテーマの比較

父親研究のテーマをみると、表1に示したように健

常児をもつ父親研究は、子どもをもつことによって、父親意識や父親自身の成長感、父親役割獲得がどうなっているのか、父親の意識の形成、役割獲得に影響する要因、父親の育児行動・養育態度との関連要因に焦点があった。健常児をもつ父親の父親意識の形成は、家族への愛情、家族を支える責任感、よい父親となる自信であり、その意識の形成は、子どもとの直接的なふれあいや育児を通して促進され、父親意識の形成への影響要因は、子どもとのかかわりや自分が子どもの頃の父親とのかかわり方や、夫婦関係の良さが子どもへの肯定的意識をもたらすことが明らかとなった。

一方、障がい児をもつ父親研究では、障がいの発症や診断から子どもの障がいを父親が如何に受容できるかどうか、母親との相違・比較から始まり、障がい児を育てる父親としての体験・心情はどうか、障がい児の養育によって父親の意識・行動がどのようになるのかが焦点であった。つまり、焦点は、障がい児を育てる父親であり、妊娠期・周産期の父親意識の形成には遡らず、子どもに障がいがあるという時点から研究テーマは出発しているといえる。

健常児をもつ父親と障がい児をもつ父親では、父親研究でのテーマの取り上げられ方が異なっていた。健常児をもつ父親の場合には父親が「育児」に向かう姿勢が、障がい児をもつ父親の場合には、父親の「障がい」の捉え方、次にその「障がい児」の育児に向き合う姿勢が父親意識の形成に影響しているのではないかという視点から研究テーマを設定しており、父親への焦点のあて方が異なっているといえる。

3. 子どもの障がいの受容と父親としてのアイデンティ ティ

父親が子どもの障がいを受容する過程や育児に前向きになったきっかけをみると、父母ともに1位は「子どもの成長」であった結果から、子どもとの直接的かかわりが重要であることが再確認された。この結果は健常児をもつ父親が育児を通して父親意識の形成が促進されているのと同じであるといえる。

育児と仕事との間で生じる葛藤は、両方の父親にみられたが、健常児をもつ父親では、「仕事への積極性や集中力の高まり、父親としての責任感」であり、マイナス面としては「一家を支えるためにリスクを避ける」であった⁷²⁾。一方、障がい児を育てる父親は、「育児と仕事のバランスをとる」⁷³⁾であり、障がいの告知

第72巻 第3号, 2013 457

当初に「ショックでご飯が食べられないくらい辛くても仕事には行かないといけない」⁷⁴⁾というショックの時期でも仕事には行かねばならないという辛さがあったが、それによって父親の役割認識が始まると考えられる。父親のアイデンティティは、「父親」という以外に「職業人」も重要な構成要素であり、健常児をもつ父親も障がい児の父親も変わりはないが、その異なる価値世界で過ごす属性間に生じる摩擦⁷⁵⁾は障がい児をもつ父親にのみ起こることであり、価値世界の異なりによる葛藤など職業人としての苦悩によりさらされやすいと考えられる。

障がい児をもつ父親がどのように父親としてのアイデンティティを持つのかについてみると、看護師から賞賛されることや、わが子を他者から大事に扱われる体験を通して、親としての人間的価値観を取り戻すという報告があり⁷⁶⁾、社会からの評価の有無が「障がい児をもつ父親」モデルを持たない父親にとって、他者から認められるという世間の評価が父親としてのアイデンティティに影響を与えると考えられる。

4. 育児への直面から促進される父親役割意識

健常児をもつ父親研究の内容をみると、父親の肯定 的な自己意識は、幼少期に温かい家庭で育った経験に よって促進されが、子どもの頃の父親とのかかわり方 や自分の父親に対する尊敬度が父性性に影響を与えて いるので、父親モデルが重要であることが示唆される。 一方、障がい児を養育する過程では、子どもの将来 像や症状の見通しなど障がい児をもつ親だから経験す る出来事が多々あり、自分が父親としてどうあればよ いのかがわかりづらい状況や、また、障がい児をもつ 父親モデルを自分の幼い頃の父親に置き換えにくく. 父親モデルを持ちにくい状況にあるといえる。しかも, 障がい児の世話を母親任せにできない状況から、自 分が養育に参加し実際の子どもの世話や育児環境を整 え、障がい児をもつ父親としての具体的な役割を開拓 し父親役割意識を高めているといえる。健常児をもつ 父親との違いは、障がい児の世話から逃げられない妻 の姿に突き動かされ78)、父親も、育児に直面して父親 役割意識を促進させ、父親となる成長をしていると考 えられる。

VI. 結 論

1. 健常児をもつ父親研究結果をみると、妊娠期・周

産期から父親意識の形成がされており、出生以降に 明らかになる子どもの障がいにかかわらず、共通に 父親意識の形成の出発点があると捉えられる。

- 2. 健常児をもつ父親意識の形成には、子どもとのかかわりや自分が子どもの頃の父親とのかかわり方が影響していた。
- 3. 障がい児をもつ父親の父親意識の形成の特徴は、 子どもの障がいへの理解や障がい児の育児に直面し て促進されるといえた。

本研究の一部は、日本家族看護学会第17回学術集会に おいて発表した。

文 献

- 1) 牛尾禮子. 重症心身障害児をもつ母親の人間的成長 過程についての研究. 小児保健研究 1998;57(1): 63-70.
- 2) 目良秋子,柏木惠子.障がい児をもつ親の人格発達 一価値観の再構築とその要因一.発達研究 1998; 13:45-51.
- 3) 月本由紀子, 足立自朗. 障がい児をもつ母親の受容と立ち直りに関する研究. 埼玉大学教育学部(教育学科)紀要 1998;47:51-67.
- 4) 夏堀 摂. 就学前期における自閉症児の母親の障害 受容過程. 特殊教育学研究 2001;39:11-22.
- 5) 北川寛明, 七木田敦, 今塩屋年男. 障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響. 特殊教育学研究 1995;33(1):35-44.
- 6) 五十嵐久人, 飯島純夫. 父親の育児参加への意識と 育児行動. 山梨医大紀要 2001;18:89-93.
- 7) 渡邉タミ子,鈴木奈緒,長嶋純子,他. 父親の育児協力・ 夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性. 山梨医 大紀要 2001;18:47-53.
- 8) 牛尾禮子,池田友美,郷間英世.重症心身障害のある子を養育する「高齢になった父親」の心情.日本 重症心身障害学会誌 2007;32(2):242.
- 9) 牛尾禮子, 川上あずさ, 奥 祥子, 他. 重症心身障害者をもつ父親の子と妻へのメッセージに関する一考察. 第29回看護科学学会学術集会講演集 2008: 460.
- 10) 宮崎 叶. 母性・父性に関する研究. 日本総合愛育 研究所紀要 1986; 22: 23-34.
- 11) 前掲書10)

- 12) 宮崎 叶. 父性についての再考察—父性についての 考察への補足と結論—. 日本総合愛育研究所紀要 1998;24:14.
- 13) 尾形和男. 子どもの発達における父親の役割についての研究(Ⅲ) —父親の子どもに対する育児と子どもの社会性との関連—. 国際学院埼玉短期大学研究 紀要 1990;11:29-41.
- 14) 牧野暢男,中原由里子.子育でにともなう親意識の 形成と変容一調査研究一.家庭教育研究所紀要 1990;12:11-19.
- 15) 小野寺敦子,青木紀久代,小山真弓.親になる意識の形成過程,発達心理学研究 1998:2:121-130.
- 16) 柏木惠子, 若松素子.「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達的視点から親を研究する試み. 発達心理学 研究 1994;5(1):72-83.
- 17) 佐々木くみ子. 親の人格発達に影響を及ぼす諸要因 一妊娠期から乳児期にかけて一. 母性衛生 2006; 46 (4):580-587.
- 18) 川井 尚, 安藤朗子, 武島春乃, 他. 父親の役割に 関する基礎的研究―母親の役割とも比較して―. 日 本子ども家庭総合研究所紀要 2006;42:177-190.
- 19) 木越郁恵, 泊 祐子. 周産期における夫の父親役割獲得プロセス. 家族看護学研究 2006;12(1): 32-38.
- 20) 岩田裕子. 父親についての文献研究. 筑波医療短期 大学研報 1998;19:9-20.
- 21) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究 2006;17(2):182-192.
- 22) 中島通子, 牛之濱久代. 立ち会い分娩後の夫の意識 に関する研究. 母性衛生 2007;48(1):82-89.
- 23) 青野真歩, 高木恭子, 笹川 泉, 他. 分娩立ち会いが立ち会う夫の感情に与える影響―立ち会い群と非立ち会い群の比較―. 母性衛生 2005;45(4):530-539.
- 24) 小林益江. 妻の妊娠期からの父親準備―胎児画像・ 胎動とジェンダー特性から―. 母性衛生 2002;43 (2):274-281.
- 25) 森下葉子, 岩立京子. 子どもの誕生による父親の発達的変化. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 2009; 60:9-18.
- 26) 清水嘉子. 父親の育児ストレスの実態に関する研究. 小児保健研究 2006;65(1):26-34.
- 27) 小林 真, 村中 彩, 中川彩子. 父親であることに

- 関する肯定的な自己意識の規定要因一幼児を持つ父親を対象とした予備的研究一. 富山大学教育学部紀要 2006:60:41-45.
- 28) 伊藤規子, 別府 哲, 宮本正一. 子どもの誕生による夫婦関係の変化に関する研究. 岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学 1998;47(1):207-214.
- 29) 神﨑光子. 妊娠後期における夫の親役割への適応に 関する研究(第1報) 一親としての態度, 行動的 変化と親意識, 妻との関係性, 子どもへの感情およ び自我状態との関連一. 母性衛生 2005; 45 (4): 540-550.
- 30) 廣瀬たい子,上田礼子.脳性麻痺児(者)に対する 父親の受容過程について.小児保健研究 1991;50 (4):489-494.
- 31) 杉原和子. 重症心身障害児をもつ父親の障害受容と 養育に関する検討. 埼玉小児医療センター医学誌 1991;8(2):35-39.
- 32) 杉原和子,小松正代,浜野晋一郎,他.重症心身障害児をもつ両親の障害受容と養育姿勢.小児保健研究 1992;51(4):517-521.
- 33) 田中美央. 重症心身障害のある子どもを育てる父親 の体験. 自治医科大学看護学ジャーナル 2007;5: 15-23.
- 34) 田中智子. 障害児の父親の「当事者性」に関する考察. 大阪健康福祉短期大学紀要 2006; 4:49-57.
- 35) 松山香織, 飯島久美子. 障害児をもつ父親の心理的 健康とその関連要因―母親との比較検討―. 小児保 健研究 2006:65(5):650-657.
- 36) 竹村淳子,泊 祐子. 幼児期の障害児をもつ父親の養育行動獲得プロセス. 家族看護学研究 2006;12 (1):2-10.
- 37) 岡光基子, 田中義人. 医療依存度の高い子どもの在 宅ケアに関する研究—父親・母親の二者関係の形成 過程—. 小児看護 2004;27(10):1380-1387.
- 38) 前掲書15)
- 39) 光田咲子, 村上明美. 初めて子どもを持つ父親の育 児感. 母性衛生 2002; 43(1):67-72.
- 40) 前掲書19)
- 41) 小林 真、村中 彩、中川彩子、父親であることに 関する肯定的な自己意識の規定要因一幼児を持つ父 親を対象とした予備的研究一. 富山大学教育学部紀 要 2005;60:41-48.
- 42) 佐藤真由美,安達万里子,宮川葉子. 陣痛室夫立ち

第72卷 第3号, 2013

会い分娩時の夫婦の感情. 第36回日本看護学会論文 集(母性看護) 2005:3-5.

- 43) 青野真歩, 高木恭子, 笹川 泉, 他. 分娩立ち会いが立ち会う夫の感情に与える影響—立ち会い群と非立ち会い群の比較—. 母性衛生 2005; 45(4): 530-539.
- 44) 伊藤靖子, 山川美由紀, 鈴木陽子, 他. 夫の妻や子 に対する意識の変化―夫立会い分娩を経験した夫と 経験しない夫の比較―. 日本看護学会論文集母性看 護 2006:37:110-112.
- 45) 前掲書22)
- 46) 佐伯正子, 袋谷友三佳, 高村 薫, 他. 立ち会い帝 王切開を経験した夫の意識調査. 成人看護 I. 2007: 33-35.
- 47) 千賀悠子. 父性意識について―夫立ち会い分娩の経験の有無と父性意識―. 日本総合愛育研究所紀要1986;22:185-190.
- 48) 前掲書44)
- 49) 前掲書42)
- 50) 岩田裕子. 父親についての文献研究. 筑波医療短期 大学研報 1998:19:9-20.
- 51) 前掲書 22)
- 52) 山縣猛日, 倉井孝子, 小林栄子, 他. 同伴分娩が父性および夫婦関係に及ぼす影響. 周産期医学 1990; 20 (8):117-120.
- 53) 前掲書24)
- 54) 臼井雅美,渡部節子. 父性性に関する研究―既婚男性の性役割観の特徴と父性性に影響を及ぼす父子関係との関連について―. 母性衛生 2001;42(2):360-367.
- 55) 及川裕子. 親性の獲得過程における変化とその影響 要因の検討. 日本ウーマンズヘルス学会誌 2005;4: 81-91.
- 56) 高瀬佳苗,河口てる子. 3ヵ月児をもつ父親の育児行動と育児に関する学習および態度との関連. 日本赤十字看護学会誌 2005:5(1):60-69.
- 57) 廣瀬たい子,上田礼子,脳性麻痺児(者)に対する 母親の受容過程について,小児保健研究 1989;48 (4):545-551.

- 58) 前掲書30)
- 59) 前掲書31)
- 60) 前掲書32)
- 61) 玉井真理子, 小野恵子. 発達障害乳幼児の父親における障害受容過程 一聴き取り調査4事例の検討一. 乳幼児医学・心理学研究 1994;3(1):27-36.

459

- 62) 平野美幸, 脳性まひの子どもを持つ父親の意識知行動の変容. 小児看護学会誌 2004;13(1):18-23.
- 63) 泊 祐子,石川清美,長谷川桂子.障害児をもつ家族に関する研究―生活の変更との関連から―.滋賀看護学術研究会誌 1996;1(1):24-30.
- 64) 前掲書30)
- 65) 前掲書32)
- 66) 谷川涼子,中村由美子.障害児をもつ家族の障害受容と自己効力感・健康状態.日本看護学会論文集. 小児看護 2007;38:137-139.
- 67) 渡辺泰子, 遠藤みどり. 障害児を持った父親の苦悩と, その変化のプロセスと影響要因についての一考察―拘束的信念へのアプローチを通して―. 家族看護 2005; 3(1):139-146.
- 68) 前掲書35)
- 69) 藤本 幹, 田中義人, 八田達夫, 他. 重症心身障害 児の主養育者である父親が抱く子ども観の分析. OT ジャーナル 2005; 39 (4): 349-355.
- 70) 前掲書36)
- 71) 前掲書62)
- 72) 佐藤奈保. 乳幼児期の障害児をもつ両親の育児における協働感と相互協力の関連. 千葉看護学会雑誌 2008;14(2):46-52.
- 73) 前掲書25)
- 74) 前掲書36)
- 75) 中北裕子, 泊 祐子. 障害のある双子の父母が体験 した育児の経過. 三重県立看護大学紀要 2008;12: 29-39.
- 76) 前掲書34)
- 77) 前掲書67)
- 78) 前掲書54)
- 79) 前掲書36)